

2021年10月分総評 杉本真維子

できるだけたくさんの詩と対話をしたいと思います。

「葉脈のような従兄弟の手を握る／／わたしも母になれるだろうか」(さいう)愛知県
「従兄弟」という絶妙な距離感の血縁を使って、「わたし」にとっての「まだ見ぬ子」を浮かび上がらせるとは、みごとです。

「そんな古傷くらい／卵でとじてあげる／／天ぷらにしても美味しそう」(さくらママ♪)兵庫県
古傷を卵でとじるという発想はなかなかないかもしれません。ユーモアの力を改めて感じました。

「電車で本を広げるとぴぴびって／差しこむひかり 戦争をしらない」(藤ほたる)神奈川県
自然光さえも味方と感じられるほどの便利な世の中。その過剰さと危うさをさりげなく指摘しています。

「服の皺ひとつに／城を作ること／容易く危うくああ十代」(高橋ちひろ)宮城県
若さが本質的に持つ過剰さをとても的確に表現しています。

「骨の折れた傘は／ひらがなのなまえを／ねむりにつかせ／収集を待つ」(翠)東京都
モノがみずからの終焉に際して成すべきことをもつ、という事実が浮かび上がります。

「現実になるべきはずの夢だった／深く深く目を瞑っている」(松下誠一)東京都
「現実になるべきはずの夢だった」という一行が魅力的です。この夢見のあとの深いつぶやきに添っていえば、夢と現実はそもそも同じものをベースにできていてその結果をいつているにすぎない、ということになるでしょう。

「母の背に負われ／蛍に触れた日の／わたしはやわい神様だった」(さいう)愛知県
三行目の素直さに感動。このように書けるのは、「わたし」が幼いながらも「母」の愛をしっかり受け止めていた証拠なのだと思います。

「パトカーが／花に追いかけられている」(細村星一郎)東京都
極端に情報を絞ることで、読み手の想像力を刺激しています。私はふと川崎洋の詩「ひどく」に出てくる、ちょっとこわいイメージのなかの「花」を思い浮かべました。「こちらにむかって／はしりだして いるのだろうか／あるいは／はな を どっさりつんだ くるまが／ひきさかれながら／みょうに わらったり している／ところなのか」(詩集『木の考え方』所収)。「パトカー」は「花」に対して何をしたのでしょうか。悪事を働いたのでしょうか。それとも、心を奪って、いわば花に恋をされている状況なのでしょう。想像は尽きません。

「風鈴をかたしていない民家から／出てきたスーツの人 早足で」(松下誠一)東京都
民家から出てきた「スーツの人」がなぜか異物のように感じられました。軒先で風鈴が揺れ、まだ夏の面影を残した民家と「スーツの人」は、そのイメージの感触がまったく異なる気がします。異質なものを組み合わせることで詩を発生させているのだと思います。

「いとごになりそびれたの／紅白の体液棄てて海にいこうか」(ベロニカ) 神奈川県
意味についてはわかったとはいえませんが、「紅白の体液」という言葉はかなりのインパクトがあり、生々しさが突出しているように思います。

「もう顔も名前も忘れた人に／つけられたあだ名は／まだ触れられる」(猫谷圭希) 広島県
顔も声も何もかも忘れてしまったとしても、言葉だけは残る、ということですね。逆にいえば、言葉を手掛かりに、忘れてしまったものたちを取り戻すことができるかもしれない、ということです。

「終電のあとの線路を剥ぎ取って／大縄跳びをしたい、ひとりで」(松下誠一) 東京都
線路が模型のように剥ぎ取られたあと、その線路を使って大縄跳びができるほどの広大な地が現れます。その解放感は孤独さえも軽々と超えるほどです。